

【会員投稿】

北総の愛染明王塔 & 二十六夜塔

藤 由 美

はじめに

令和元年度当会の石仏ゼミナールのテーマは、「石造物にみる日待・月待」。月待塔のうち、二十六夜塔とその本尊の愛染明王塔についてより詳しく知りたく、北総地域での集成を試みています。

愛染明王塔信仰については、本会の三代川千恵子会員が、『日本の石仏』No.160に、「石像愛染明王塔の庶民信仰の流れを追って―江戸・甲州・下総の事例から」を書かれています。この報告では、中世の武士・修験者の守護神から、近世になって生業の守護神に変化する愛染明王信仰の実態を石造物から調べられ、特に江戸の藍染業者の信仰と、甲州の養蚕や織物業者の二十六夜月待信仰の実態を述べられています。最後に下総農民の二十六夜と愛染明王に関連する石造物について船橋市と八千代市、隣接する佐倉市と旧印旛村所在の36基の一覧表を提示、さらに二十六夜待の本尊が愛染明王である根拠

として、「修験深秘行法符咒集」にその記述があることを明かされておられました。この論考に心惹かれて、私も二十六夜塔と愛染明王塔について調べてみたくなり、各地域の石造物調査報告書などを参照して、現地確認の探索を続けています。

(1) 北総の二十六夜塔 & 愛染明王塔集成

現在総数は83基。市町村別内訳は、八千代市20、船橋市11、旧印旛村10、旧佐原市10、我孫子市8、佐倉市6、旧本埜村4、旧印西町3、成田市4、旧小見川町2、東庄町・酒々井町・松戸市・富里市・習志野市が各1で、悉皆調査されている白井市・千葉市・四街道市・芝山町・横芝光町・干潟町は各0でした。

紀年銘では、寛文から宝永までの江戸前期が11、享和までの中期が25、後期が27、近代が14、戦後から現代までが3、不明3です。

うち、二十六夜塔は69基（愛染明王像7基・「愛染明王」銘または種字14基・他の仏像9基）、愛染明王供養塔13基（愛染明王像9基、銘または種字4基）、時念仏塔（愛染明王像）1基でした。

愛染明王が主尊の二十六夜塔が現れるのは佐倉市城の元禄五年（一六九二）銘

塔からです。

一方、旧佐原市の二十六夜塔10基のうち、前期と中期の8基は地藏・観音菩薩・阿弥陀如来が主尊で、愛染明王が主尊であるのは、文化九年銘の1基だけでした。

二十六夜塔および愛染明王塔が銘文から女人講主体と推定できるのは、12基です。江戸後期では印西市が4基、船橋市が2基、富里市と旧佐原市が1基、近現代では八千代市域が4基で、江戸中期までは女人講との関係は見られませんでした。

他に「若者中」銘の二十六夜塔が幕末の八千代市に見られました。

また、主尊名「花染命」の二十六夜塔が旧印旛村にありました。

(2) 特色ある二十六夜塔 & 愛染明王塔

江戸時代前〜中期中葉までは、我孫子市・佐倉市・旧印旛村の古城址近辺の旧村に愛染明王像刻像塔が多く、中後葉からは、成田街道や御成街道沿いなどの街や農村に「二十六夜」の文字塔が広がっていきます。

その中で、優れている像塔と代表的な文字塔を紹介します。

① 印西市平賀の延宝二年銘時念仏塔



大日如来石像の脇侍と推定される愛染明王像塔で、『続房総の石仏百選』で早川正司氏および『日本の石仏』の三代川さんの著述に詳しく紹介されている優品です。

「供養之衆二世安楽処／奉造立愛染明王時念仏」の銘および女性を含む百三十人以上の人名が刻まれていて、像容は珍しい立像です。

②佐倉市城田城跡の元禄五年銘二十六夜塔



光背型愛染明王坐像に「奉造立愛染明王／二十六夜講同行廿二人」の銘が刻まれています。

田城寺跡は、その名も「城」という地名にある「城城」を拠点にした中世前期

の六崎氏、中世後期の原氏と並ぶ千葉氏の重臣「田城寺」氏のゆかりの地で、千葉と本佐倉城・白井城を結ぶ「佐倉街道」（県道65号線）の中間地でもあります。

③船橋市高根町観行院の貞享五年銘二十六夜塔



笠付角柱型文字塔で、愛染明王の種字「ウーン」と、「帰命月廿六夜葛飾郡下総国高根村／大旦那貞享五天辰二月廿六日 中興尊恵／願主藤次郎」ほか十人の人名が刻まれています。

④成田市奈土昌福寺の明和七年銘愛染明王塔



愛染明王の姿の特徴は、「二面二目・六

臂で、頭上には獅子の冠を頂き、冠の上には五鈷鉤が突き出ている、その身は赤色で宝瓶の上にある紅蓮の蓮華座に、日輪を背にして座る」という。この明王像は円形の日輪に浮彫ですが、丸彫りに近く、蓮華座と宝瓶は立体的、さらに蓮弁の反花座と格狭間を施した台石に載る本格的な構造の石像です。

⑤八千代市上高野の文化八年銘愛染明王塔



文化八年（一八一二）〜天保九年（一八三八）の間に、船橋市本町道祖神社・佐倉市弥勒町松林寺・八千代市上高野・佐倉市井野千手院・酒々井町上本佐倉神明大神社・富里市中沢昌福寺・船橋市夏見日枝神社には、儀規の図像による細密な愛染明王像を浮彫した類似の像塔が建立されています。

いずれも軟質の石材を使用しているため現状不良のものが多く、八千代市上高野と酒々井町上本佐倉の像塔は、祠

内に安置されていたため保存状態がよく、繊細な浮彫像が残されています。

⑥印西市瀬戸の子育地藏尊の明治十年銘道標 付き二十六夜塔



安永八年銘の印西市荒野の塔から明治十八年銘の八千代市高本八幡神社の塔まで、道標付き二十六夜塔が6基あります。

その中でも、瀬戸の二十六夜塔は流麗な書体で「二十六夜塔／講中廿一人／よしたか／なりたみち／さくらみち／かまかり／東京道」銘が刻まれた角柱型塔です。

③愛染明王に人々は何を祈ったのか

愛染明王は「煩惱即菩提」、すなわち愛欲を浄化させ覚りへと導く明王とされますが、愛染明王に人々は本来何を祈ったのでしょうか。

北総の愛染明王塔で、その功德が明確

に記されていたのは、成田市奈土の昌福寺墓地にある明和七年（一七七〇）銘の愛染明王塔です。その基礎には「四海泰平／風雨順時／金輪聖皇／寶祚長遠／台樹殿下／當所領主／武運長久／家門安全／子孫長栄／如意満足」の願文が十行で記されていました。

「寶祚長遠」の「寶祚」とは、天子の位のことです。『太平記十七』に「もつぱら寶祚の長久を祈り」との記述がある。江戸後期く近代、恋愛・縁結び・家庭円満を司る仏として、また都市部では染物業や水商売の女性の信仰を集めたといわれますが、「愛染法」は本来、息災、利益、降伏、敬愛を修する法でした。特に中世では戦勝、息災の修法が盛んであったといわれます。

愛染明王への祈願で歴史上有名なのは、文永（一二七二）弘安（一二八二）の国難に際して、西大寺の叡尊が「末世の凡夫 誠心有難きゆえ諸願また成りがたし 秘密威法を仰ぐにしかず」と岩清水八幡宮に念持仏の愛染明王像を運び、「東風をもつて敵船を本国に送り、乗人を損傷することなく、乗船を焼失させ給うように」と祈ったことでした。

そして「神風」が吹いて元寇が撃退さ

れた際、愛染明王像の持つ鏑矢が西を指して飛んで蒙古を滅ぼしたといわれ、この靈驗譚は広く流布しました。（叡尊ご自身は「モンゴルの民に死傷者がでたことは、自分の祈りが足りなかった」と気落ちされていたとのことです。）

また戦国時代に造像された旭市野中の長禅寺の愛染明王像の胎内には「永禄八年（一五六五）、村が放火で焼き払われ、寺も炎上、さらに寒波で五穀は稔らず、五ヶ村の餓死者千余人。農民の呻吟の中、翌年に寺を再興、十二年愛染明王像が完成した」との墨書銘が残っていました。（小笠原長和『中世房総の政治と文化』奈土の昌福寺の愛染明王塔の銘文からは、戦国期の土豪がそのまま近世の有力農民になった下総の農村部において、地球規模の泰平から、天皇、領主、家と子孫の長栄と祈願するという世界観で、祈っていたことがわかります。）

愛染明王への祈りには、個人の現世利益を超えて、自然や国家、民衆の生活の危機に際し、より強い法力を求める共同体の悲願がその基本にあったのだろうと思われました。